

第三セクターの持株会社化概要決まる。設立は9月1日の予定

地域の特徴や個性を発揮した経営や労働条件などで懸念の声も

上越市第三セクター持株会社設立準備会が5月に開かれ、現在、関係区の地域協議会などで持株会社化の概要説明が行われています。

それによると、持株会社名は「J-ホールディングス株式会社」。本店を西本町四丁目の直江津屋台会館に置きます。事業内容はこれまでお伝えしてきましたように、事業会社の株式等の取得・保有及び事業会社の経営管理となります。

資本金は1億円。設立は本年の9月1日を予定しています。

持株会社化の目的は、第三セクターの会社と施設の存続・発展を図ることにあります。集客力の低下、施設設備の劣化などが進む中でどう経営改善をしていくのかが問われています。

持株会社化を図る中で、大きな会社とすることによる効果を追求し、集客力をアップする、経費の削減をする、運営方法の交流・導入をする

としていますが、具体的に何をやるかはまだ見えていません。関係者のなかには、新たな体制のなかでの経営改善に期待がある一方で、「これまで創りあげてきた会社の個性や特徴が生かせるのか」「従業員の労働条件が悪化しないか」などといった声もあります。

こうしたことはしっかりと見ていく必要があるでしょう。

今回、持株会社の体制として示されたのは、常勤取締役1名、非常勤取締役7名、そして非常勤監査役2名。いまのところ常勤取締役には上越市出身で元JCBトラベル副社長の伊藤利彦氏（67）＝東京都小金井市在住＝を予定しており、非常勤取締役には持株会社に参加を予定している第三セクターの代表取締役を充てることとしています。

■ 持株会社化の目的

- ・ 昨今の厳しい経営環境の中、第三セクター(7社)と各社の施設が存続し、発展するために、持株会社を使ったスケールメリットを追求し、損益構造の改善を図ります。

外部環境の変化 施設設備の劣化 地方財政の変革

- 持株会社によるスケール・メリットの追求
- ① 集客機能の拡充・強化
 - ② 経費の削減
 - ③ 運営ノウハウの交流・導入

※ 対象法人(7社)

- ・ ㈱キュービットパレイ
- ・ 柿崎総合開発㈱
- ・ ㈱大湯地域活性化センター
- ・ ㈱ゆつたりの郷
- ・ 黒倉ふるさと振興㈱
- ・ 三和振興㈱
- ・ ㈱ゆめ企画名立

7社※による持株会社の設立

地域の未来と笑顔を創る



図案化された会社名

等々の運営を委託している第三セクターの経営基盤の強化に資する」として、持株会社の設立準備のために必要な経費2086万円盛り込んだ一般会計補正予算を提案していました。



【イワガラミ】アジサイ科だけあってアジサイに似た花をつけます。花は白。岩や木からみついて、ツルを伸ばしていきます。写真は浦川原区長走にて撮影したものです。



消防団方面隊の演習、各地で実施

6月に入り、上越市消防団の各方面隊が各地で演習を行っています。16日は吉川方面隊の演習でした。

朝7時半からの駆けつけ放水訓練には岩野副団長も駆けつけ、点検しました。同副団長は、「昔からのいところをちゃんと引き継いでいる。きびきびしている、気持ちよかった」と感想をのべていました。演習はその後、吉川中のグラウンドで行われ、部隊訓練、機械器具の点検、小型ポンプ操作などに取り組みました。

日本共産党議員団では、第三セクターについては、それぞれ、その地域の地域おこしなどを考慮し設立された事情があることから、今後の動向を注視しつつ、対応していきたいと考えています。

なお、持株会社に参加した第三セクターについてですが、大方の人の予想した通り、持株会社設立に参加する会社は8社ではなく、7社でした（上の図を参照）。

春よ来い 第二五九回 ドングリ

今春、ドングリの芽と出合ったおかげで、今年は植物の新しい世界に招待されたような気分をたびたび味わっています。

ドングリの芽を見つけたのは雪解けが進んでいた三月の上旬でした。市道脇にある側溝と雑木林との間に落ち葉や枯れ草でおおわれているスペースがあり、そこにドングリがいくつか転がっていました。ただそれだけなら通り過ぎたのでしようが、皮が破られ、ちよっぴり赤くなった実の見えたものがありました。しかも、その実の先はとがりはじめでいて、これから芽を出そうとしていたのです。雪の重みと冷たさに耐え、ドングリが新しい生命をのばそうとしている、これからどうなっていくの难道うかと、とても気になりました。

その日から、ドングリの転がっていた場所を通るたびに、足を止めるようになります。最初に見つけたドングリの周辺をよく観察してみると、ドングリの実が割れているものは他にもまだありました。そして、芽を出しはじめたものの、凍傷にあったのか、そのまま先が黒くなって枯れてしまったものもいくつもありません。芽を出しているものは寒さに耐え、勝ったものです。これは目を離せません。

約一ヶ月後、ドングリに大きな変化が起きました。少し赤みがかかったドングリの実がパカッと二つに割れ、真ん中の部分から、明らかに芽だとわかるものがすつと出ていたのです。芽の長さは一センチあるかないくらい、色はいかにも出始めといった感じの乳白色でした。

真ん中から伸び始めた芽は、二週間ほどの間にどんどん変わっていききました。何よりも背丈が伸びました。最初は一センチほどであったものが五センチほどになりました。色も赤みを帯びたものへと変化し、力強さが出てきました。さらに、芽の先端部分では葉を作り、開いていきました。上の方を向いて開き始めた葉は五日ほどで水平になり、続いて地面の方へと下がりました。

葉が赤っぽい色から黄緑色へと変わり、葉の数が四〜五枚へと増えてからはなかなか大きな変化は生まれず、次第に毎日の観察はしなくなりました。ところが、六月の半ばを過ぎて事件が起きました。道路脇の除草が行われたのです。「しまった」と思いました。除草が行われる前に移植しておかなければ、刈られてしまうと思っていながら、その移植をすっかり忘れてしまっていたのです。

ドングリには申し訳ないことをしたと思いつながら、草刈りがされた場所で、手で少しずつ草をどけながら、さがしました。一度目にはわからなかったのですが、二度目に、丁寧にさがした結果、観察し続けていたドングリの木のそばにあった直径一センチほどの枯れ枝を見つけました。そして次の瞬間、ドングリの木、そのものを発見したのです。あまりにもうれしくて、「あつたあ」と声を出してしまいました。四枚の葉はいずれも三分の一ほどちぎりが取られていましたが生きていたのです。

さて、生き残ったドングリの木をどこに移植したらいいのか。そもそもドングリはどんな土を好むのだろうか。そう思って、先日、ドングリの木が大きく育っている林の中に入り、ドングリの木の根の周辺の土を掘ったり、匂いを嗅いだりしてきました。落ち葉の下にはぼろぼろになった葉や木の枝があり、何種類ものアリたちが忙しそうに動いていました。でも、木の根の周辺では芽をだした小さなドングリの木は一本も見つけることができませんでした。うーん、これは一体どうしたことか。

党議員団で干ばつ調査

日本共産党議員団は17日、浦川原区、牧区、大島区を回り、干ばつ被害状況を見てきました。作付すら出来ない田んぼがけっこう多く、昨年よりも深刻だと感じました。

浦川原区法定寺は昨年も行っ

たのある田んぼでした。田打ちを途中でやめた感じになっている田んぼが数枚ありました。牧区片町の作付出来ない田んぼ(写真)は、手が入るほどのひび割れができていました。大島区上達の田はおそらく今回の最大の被害田でしょう、大きな田んぼ数枚が雑草で青々としていました。

この日は午後から、平良木議員とともに川上農林水産部長など幹部と干ばつ問題で懇談しました。

この中で、市側は、これまでの調査で作付不能の田んぼが約8割にのぼっており、田んぼのひび割れ、用水不足などで今後、数十ヘクタールに被害が広がる可能性があることを明らかにしました。

こちらからは、現地調査結果をもとに、①調査に当たっては、被害面積、被害予想面積だけでなく、その背景にある原因をつかむ努力をしてほしいこと、②ポンプ購入など、干ばつに伴う出費についても確認してほしいこと、

③中央農業研究センターなど研究機関の知恵を総結集して、対策を考へること、④ため池の新設など対策に向けて利用可能な事業をわかりやすく紹介してほしいこと、また、弾力的な運用ができるような制度にしてほしいこと、などを要請しました。

懇談では、「コンバインの普及とともに田んぼの水管理が変わってきて、新たな困難が生まれている」「ため池の修繕などで団体営農業基盤整備促進事業が人気で、今年度は22カ所で取り組む」「県議のみなさんが議会で取り上げてくださるなら、県の制度改善を求めてほしい」などの声が出ました。



上越地域各消防署における空間放射線量測定結果(測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だということです。

	6月19日(水)	6月12日(水)
上越南消防署	0.053	0.036
上越北消防署	0.057	0.047
新井消防署	0.080	0.048
頸北消防署	0.060	0.046
頸南消防署	0.063	0.040
東頸消防署	0.060	0.043
高土分遣所	0.076	0.047
名立分遣所	0.053	0.050